氏　　名	張（ちょう）　南（なん）南（なん）

（論文内容の要旨）

本論文は、中国陝西省北西部の涇河南岸に位置する彬県大仏寺石窟を取り上げ、大仏寺石窟を構成する西部石窟群、大仏洞、千仏洞、羅漢洞の諸窟について、石窟の構造、仏像様式、図像学的表現、造像銘などの観点から、従来の説を厳密に再検討したうえで、改めて造営年代を提起し、さらに大仏寺石窟の全体の統一様式、時代様式を論じたものである。また附録として、現地調査に基づいた大仏寺石窟碑銘の校勘を収め、従来の拓本だけに基づいた著録内容を訂正する。本論文は、「はじめに」、全四章から成る「本論」、及び「結論」の六部で構成される。「はじめに」において、先行研究、問題提起、および研究方法に触れる。以下、「本論」の章ごとに内容の要旨を述べる。

第一章「大仏寺石窟造営年代再考」においては、碑刻史料からみた大仏寺石窟の補修史、大仏洞大仏の具体的な補修経過を述べたうえで、大仏寺石窟全体の造営年代、及び最も前期の造像に属する西部石窟群、そして大仏洞大仏の造営年代を論ずる。まず大仏寺石窟の造営開始年代については、『嘉靖　州志』などの文献史料は、大仏光背の貞観２年（628）題記に基づき、唐太宗の貞観年間とする。しかし、現代の研究者たちは、西部窟群に注目して、開始年代を北周或いは初唐とする。李氏は、千仏洞で発見した「武太一題記」に基づき、大仏寺の前身である唐代の応福寺は、秦王時代の太宗李世民が、武徳元年（618）11 月の薛挙・仁杲父子の討伐戦で戦死した兵士を慰霊するため、同年に創建したとし、大仏洞大仏は光背題記通り、その 10 年後に当たる貞観２年(628)11 月に完成したとした。常青氏はこれに多少の修正を加えたが、大仏の造立年代については同意見である。

これらの説に対して論者は、「武太一題記」の内容を詳しく吟味したうえで、李世民が、大仏寺から西へ約 20 キロの長武県浅水原での決戦で戦死した兵士を慰霊するために建てたのは、応福寺ではなく、現在も同地に位置する昭仁寺であって、貞観２年に建てた七寺のうちの一つとする。そして、大仏光背の貞観２年題記につ

いては、その信憑性に疑問を呈したうえで、最も早期に属する西部窟群の造像様式を詳しく検討することによって、大仏寺の造営開始時期を探る。それによれば、第1窟から第7窟までの窟のうち、高宗から則天武后時期の第4、6、7窟を除く残りの4窟は、隋代の西安市八里村出土の金銅五尊仏坐像、ボストン美術館所蔵の西安請来菩薩立像などと造像様式を比較したうえで、隋ー初唐の造像とし、隋代を上限とした。

また、大仏洞大仏の造営年代については、まず、これまで年代の根拠とされてきた光背の「大唐貞観二年十一月三十日造」と刻した題記の真偽を検討する。その結果、「貞観」の「貞」字は貞ではなく真の字であること、「大唐」の「大」字は、南唐王氏の墓誌蓋に篆書で書かれた「太」字の大と似るなど、五代以後の書体であること、北宋の　州郡守宋京の宣和3年(1121)題詩に貞観題記のことが詠まれていることなどから、この題記は五代から北宋時代にかけての偽刻とした。この偽刻とする見解は論者が初めて提起したものではなく、閻文儒が1987年に発表した説であり、閻文儒はほかにも大仏洞の菩薩像の様式が千仏洞の長安2年（702）に彫られたQ71龕やQ90龕に近いことなどを理由に、大仏の建立年代を武周期(690-704)前後とした。この偽刻説はその後注目されることがなかったため、ここに論者が改めて提起したのである。そして論者は大仏の造営年代を推定する一つの手掛かりとして、光背の上方に刻された日輪と月輪を捧げる両手の表現が、敦煌莫高窟第321窟南壁壁画「宝雨経変」の画面最上層にも見られることを挙げ、後者が武周期に属して武周期特有の表現であることから、前者の図像が刻された大仏の造立時期も則天武后の時代であると推定した。

第二章「千仏洞造像及び編年」では、大仏洞東側に位置する千仏洞の造像様式と造営年代を検討する。この窟は中心柱窟であるため龕の数が175と多く、唐代、とりわけ武周期の年紀を有する造像銘が多いことが特色である。そこで、まずその仏龕がどの造像銘と対応するかを整理して年代を明確にし、また龕内造像も仏像龕、菩薩龕、多尊像龕の三種に分けて様式と年代を考察する。その結果、千仏洞の造像様式は基本的に武周期前後に属すとする。但し中心柱は北朝-隋時代に流行した構

造形式であるから、開鑿後に一定期間、造像の空白の時期があったことが指摘される。そして唐代に入ると、まず中心柱正面に　州長史武太一が発願した龕が造られ、少し後の咸亨２年（671）頃、『般若波羅蜜多心経』と『仏説温室洗浴衆僧経』がその西壁に刻されたのである。その後、千仏洞内部の造像は急激に増加し、長安２年（702）に皇族の武氏が発願造営した時には、僅かに東西二壁の奥しか利用すべき空間は残っていなかったほどであった。

第三章「羅漢洞造像及び編年」では、大仏洞の西側に位置する羅漢洞の造像様式と年代について論ずる。羅漢洞の窟内構造は変則的であり、半円形をした西室（主室）と奥に深い長方形をした東室から成る。残存する仏龕は約39あり、論者はそれらを逐一説明した後、造像様式の分析を試みる。それによると、羅漢洞の造像は胴体がふくれて、動きはあまりなく、形が硬いのが特徴で、主に中、晩唐時期に造営されたものとみられる。これは羅漢洞内部に残った銘文からも傍証できる。但し羅漢洞内で最も規模が大きいL1龕は、異なった時代様式を示し、繊細な造形の菩薩立像だけみれば、武周期或いは後の玄宗期の造像にもみえる。また天王のつける鎧は南北朝期の裲襠鎧に似るが、唐代に流行したのは明光鎧であって、特に武周期の仏教造像に裲襠鎧の例は見あたらない。これは、宋代或いは後代の修理の結果であると解釈する。要するに、羅漢洞の主要な造像は、中、晩唐に属するのである。

第四章「大仏寺石窟造像様式論」においては、さまざまな方法を用いて大仏寺石窟各窟の様式的特徴、また石窟全体の様式的特徴を明かにしていく。第一節では、千仏洞の菩薩像は体躯と頭部を三回曲げる三屈法を採用して動きを強調するが、羅漢洞の造像は身体の動きは無視して、重厚な塊量をもって沈着さを強調しようとし、これが両窟の最大の違いとする。また大仏洞と羅漢洞を対比するのに大仏洞大仏周辺の諸小龕を導入し、後者の様式が千仏洞に近いことを明かにすることによって、大仏坐像の年代を傍証する。第二節では、千仏洞武氏造像龕の菩薩立像にみられる誇張した腰の動きの表現に注目し、これは長安年間の光宅寺七宝台造像を含め、同時期の周辺造像には全く見られない独特の様式であるとする。逆に第三節では相違より類似を強調し、例えば千仏洞内にみられる武周期の僧形地蔵菩薩坐像は、四川

の寺院の張僧　壁画に来源し、高宗期に長安で流行して、武周期の千仏洞に集中して出現したとし、長安との関係の緊密さを証明する。このように大仏寺石窟の造像は関中地区において独自の様式をうちたて、それ自身特徴を際だたせているが、同時に長安と緊密な連係を保持していたのである。

結論では、以上の造像様式に関する考察に基づいて3期に分け、隋から初唐の第1期は、西部窟群の第4.6.7窟以外の窟、高宗・則天武后期の第2期は、大仏洞、千仏洞及び西部窟群野代4.6.7窟、中唐以降の第3期は、羅漢洞及び羅漢洞外西側の小窟が該当すると分期した。また大仏寺石窟造営の契機については、大仏洞と千仏洞に関しては、武周期における全国規模の仏教造像熱によるもので、平民百姓から地方官僚、王公貴族までが発願者となっており、政府が提唱した全国規模の仏教に対する熱狂を反映していたとする。これに対すれば羅漢洞の造像規模は比すべくもなく、これは一面、盛唐の後、石窟の開鑿が既に下火になっていたことに由るものであり、また一面、この地区で頻繁に起こった戦争と不可分の関係にあり、特に羅漢洞の明確な年紀を有する二つの唐代仏龕の造像が、ともに二回の唐蕃会盟の直後になされているように、政治情勢が石窟の造像活動に及ぼした影響を指摘する。

氏　　名	張（ちょう）　南（なん）南（なん）

（論文審査の結果の要旨）

中国の石窟寺院は、中国仏教美術を代表するモニュメントであり、主に北朝と唐代に大小さまざまの石窟が各地で盛んに造営された。雲岡、龍門、敦煌の三大石窟は規模においてその最たるものであるが、他にも響堂山、天龍山、麦積山、炳霊寺、キジル石窟などの大規模石窟だけでも枚挙にいとまがなく、中・小規模の石窟に至っては無数と言っていいほどである。そうした中で、本論文が取り上げる陝西彬県大仏寺石窟は、西安の北西約160キロの涇河南岸に位置して、最も大きい大仏洞大仏坐像は高さ24ｍの偉容を誇るものの、窟龕の数はそれほど多くはなく、中規模の石窟といえる。しかし、上述の大規模石窟については、これまで多くの研究がなされてきたのに対し、これら中規模の石窟については、他に四川の諸石窟に典型的にみられるように、これまで研究がほとんどなされず、近年やっと端緒についたのが実情である。本論文はこの彬県大仏寺石窟に焦点をしぼり、数次にわたる現地調査に基づき、石窟を構成する西部窟群、大仏洞、千仏洞、羅漢洞の各々について、窟の構造、造像様式、図像、造像銘などの観点から、大仏寺石窟の最も重要な問題である造営年代を主に論ずる。そこには、従来の説はもちろん、近年のほかの研究者の説に対しても、変更を迫る成果が多々みられ、中国の石窟研究に重要な貢献をなしたものと評価し得る。

論文全体は四章から構成され、第一章では、まず大仏寺石窟の造営開始年代が論じられる。文献史料は、大仏洞の大仏光背にある「貞観２年（628）題記」に基づき、一様に唐太宗の貞観年間とするが、ここでは主に千仏洞で発見した「武太一題記」をもとに提起された李　氏の説を紹介し検証する。大仏寺の前身である唐代の応福寺は、秦王時代の太宗李世民が、武徳元年（618）11月の薛挙・仁杲父子の討伐戦で戦死した兵士を慰霊するため、同年に創建したとし、大仏洞大仏は光背題記通り、その10年後の貞観２年(628)11月に完成したとした。これに対して論者は、唐建国直後の建立開始は早すぎること、秦王時代の李世民は仏教を冷遇したことな

どを反証に挙げるとともに、李世民が、大仏寺から西へ約20キロの長武県浅水原での決戦で戦死した兵士を慰霊するために建てたのは、応福寺ではなく、現在も同地に位置する昭仁寺であって、貞観2年に全国に建てた七寺のうちの一つとした。このような見解の相違が生ずるのは、ひとえに「武太一題記」の左下部分が欠けて読めなくなったがためである。論者の説が合理的な解釈であるかにみえるが、残存する造像銘自体に「昭仁寺」の文字がみえず文意をもって補ったものであり、更なる考察を必要とする。

次に西部窟群の造像様式を一窟一窟詳しく検討する。その結果、全7窟のうち、高宗から則天武后時期の第4．6．7窟を除く4窟は、伝世する作品などと様式を比較検討したうえで、隋ー初唐の造像とした。西部窟群の仏像は風化が激しく明確な造像様式を摘出することはなかなか困難であるが、もし隋代にまで遡る造像であることが立証できれば、上述の李　氏の説も根拠を失うことになる。

大仏洞の大仏光背に刻された「貞観二年題記」は、本論文における最も主要な問題である。全体は「大唐貞観二年十一月十三日造」と刻され、「十一月十三日造」は字を小さく二行に書かれている。この題記がこれまで大仏のみならず大仏寺石窟全体の造営年代を決定する決め手となってきたが、これに対して論者は後代の偽刻とする見解を展開する。偽刻説は論者が初めて唱えたものではなく、閻文儒が既に1987年にその著『中国石窟藝術総論』において発表している。彼は「貞観」が「真観」と書かれて、北宋仁宗の諱趙禎の「貞」を避けたものであることを指摘し、宋代の偽刻とした。そして大仏の建立年代も様式的観点から則天武后時代以後とした。しかし、この説はその後注目されず、李　氏、『彬県大仏寺造像藝術』を著した常青氏もこの題記をそのまま採用して、大仏の貞観二年建立説をとる。従ってここに改めて偽刻説を提示して定説の変更を迫ることは大きな意義を有するが、それだけに慎重な考証が要求される。論者は「貞観」の「貞」字が貞ではなく真であることを、唐代の碑文、墓誌銘などに照らして詳しく検討するとともに、新たに「大唐」の「大」字の特殊な書体が、南唐保大4年（946）の王氏墓誌蓋題字に使用されていることを突き止めるとともに、下の「十一月十三日造」を二行に分け小さく刻す

形式も、大仏寺石窟の北宋題記に3例あることを指摘した。北宋期の偽刻であることはほぼ立証されたとみてよかろう。しかし依然として大仏の造営年代の問題が残っており、これに対して論者は、光背上方の日輪と月輪を捧げる両手の表現が、敦煌莫高窟第321窟南壁壁画「宝雨経変」の画面最上層にも見られることを挙げ、後者が武周期に属して武周期特有の表現であることから、大仏の造立時期も則天武后の時代であると推定した。なお考証は不十分の域を出ないが、そのための更なる考証が以下の章においてなされる。

第二章は大仏洞東側にある中心柱窟千仏洞の造像様式と造営年代を扱う。この窟は龕の数が175と多く、唐代、とりわけ武周期の年紀を有したり則天文字を用いた造像銘が多いことも特色である。論者は仏龕と造像銘の対応関係を整理し、また龕内造像も仏像龕、菩薩龕、多尊像龕の三種に分けて、仏龕の様式と年代を詳しく考察する。その結果、隋代頃に中心柱窟形式の窟が開鑿されて、一定の空白期間を経た後、咸亨2年（671）に『般若波羅蜜多心経』と『仏説温室洗浴衆僧経』の2石経が刻され、更に武周期に入って造像が急激に増加したことを指摘する。千仏洞の造像が基本的には武周期前後に属するとの指摘は重要である。また長安2年(702)の皇族武氏の造像銘と仏龕が確認されたことも注目に値する。ここに大仏洞の武周期造営を立証するのに必要な資料が得られたのである。

第三章では、大仏洞を中央にして千仏洞と対称の位置にある羅漢洞の造像様式と年代について論ずる。羅漢洞の構造は変則的であり、残存する仏龕も約39あるのみであるが、胴体がふくれて、動きがあまりなく、やや硬直化した形態の仏像様式を指摘して、主に中、晩唐期に造営されたものとする。大暦12年（777）銘の文殊菩薩騎獅像、開成元年（836）銘の弥勒仏倚坐像もそれを裏付ける。従来、羅漢洞の造営時期、造像の年代については曖昧であったが、論者は中、晩唐に至って初めて開鑿もしくは利用されたことを指摘する。仏教造像が下火になり、石窟の開鑿も稀になった中・晩唐にあって、明確に造像例が得られたことは貴重である。

第四章は大仏寺石窟全体を振り返って、その様式的特徴、造像の特徴を指摘し、他の地域を含めて造像の意義を述べる。まず第一節では、千仏洞の菩薩像に顕著な

三屈法の採用を指摘して、これが羅漢洞の動態表現を無視しがちな造像との最大の違いであるとし、また大仏洞の大仏脇侍菩薩や周辺の諸小龕における類似の表現を挙げて、大仏洞の様式が千仏洞のそれに近いことを述べる。また第二節では視野を広くして、千仏洞の武氏造像龕に典型的にみられる三屈法に伴う誇張した腰の動きの表現が、同時期の周辺造像、特に長安の造像には全く類例がなく、大仏寺石窟独特の様式であるとする。しかし大仏寺石窟が関中にあって全く孤立していたわけではなく、第三節では千仏洞にみられる僧形地蔵菩薩像が、高宗期に長安で流行して、武周期の千仏洞に集中して出現したことを挙げる。大仏寺石窟は独自の表現が数多くみられ、地方様式として孤立していたように見られがちであるが、同時に長安、更に四川などとの緊密な連係があったとの指摘は傾聴に値する。

このように、本論文は随処に独自の説がみられ、彬県大仏寺石窟の研究に貴重な一歩を記したものといえる。しかし、所説にはなお未熟な点もみられ、特に文献史料の扱いについては、なお一考の余地があると思われる、無論それらの問題点の解決は論者が今後の課題とすべきものであり、本論文そのものの価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2009 年 2 月 17 日、審査委員 3 名が論文内容とそれに関連する事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。